

大分大学経済学部創立一〇〇周年記念
式典

経済学部同窓会

一般財団法人「四極会」 会長 挨拶

大分大学経済学部 創立一〇〇周年、おめでとう
ございます。

一〇〇年にわたって、その歴史と伝統を紡いで
きた母校 経済学部の 創立一〇〇周年に当た
り、経済学部同窓会、一般財団法人「四極会」
を代表し、ご挨拶申し上げます。

一 大正年間に、全国で、商業・商学に関す
る実務家を養成する 高等教育機関として、北は
「小樽 高等商業学校」から、南は「大分 高等
商業学校」まで、十二の「官立 高等商業学校」
が設置され、その後、多くの卒業生が、全国で、
あるいは地域経済社会において活躍されていま
す。

「大分 高等商業学校」の同窓の中にも、本
日ご出席の、黒土 始 前 第一交通産業 株式
会社 代表取締役 創業者会長をはじめ、

野内 四郎七 第九代 大分銀行頭取や、
桑原 豊 元 大分県副知事など、多くの先輩
方が活躍され、「大分 高等商業学校、大分大学
経済学部ここにあり！」と、その存在感を示され
てきました。

なお、経済学部の先生方におかれても、学識
豊かで、かつ、行動力にあふれ、県内の経済界、
企業、行政から 大きな信頼を寄せられるとともに、
大分県民にとっても、さまざまな機会を
通じて、いわば「顔」が見えていた、「存在
感」ある多くの先生方が活躍されてきました。

二 ご案内のとおり、現在、我が国 そして地
域経済社会は、人類の生存そのもの にも直結
する「地球温暖化問題」、人類史上 7番目の「パ
ンデミック」である 「新型 コロナウイルス感
染症」の拡大、急激に進行する 少子・高齢化、
さらには 高度情報社会、デジタル・トランス

フォーメーション（DX）への対応など、数多くの、解決すべき喫緊の課題に直面しています。

このような課題の解決のために、ここ、大分の地において 「知の拠点」である、 国立大学法人大分大学、 経済学部が 果たすべき役割には 極めて大きいものがあり、 創立一〇〇周年を迎えた経済学部は、いま、その存立意義が、 まさに、その「真価」が 問われている と考えられます。

三 現在、 国立大学法人大分大学、 経済学部が 果たすべき 重要な役割としては、「研究」、「教育」にとどまらず、「地域貢献・社会連携」も 挙げられています。

その一方で、 先が見えない 不透明・不確実な経済社会の 動向などを反映し、 県内の経済界、企業、行政、ひいては大分県民の、 経済学部に対する期待は、 いますます大きくなっ

ています。

このような期待に応えるために、経済学部においては、今後、「地域貢献・社会連携」についても、より一層、積極的に取り組んでいくことが望まれます。

ここ、大分の地における「知の拠点」として、これまで、小さくとも、いわば「キラリと、光り輝く」存在であった、経済学部が、これからも、地域経済社会の中において「キラリと、光り輝き続ける」存在であって欲しいと、願うのは、私一人ではありません。

四 教育は 国家存立の礎であり、「国家百年の計」といわれます。

いま、国立大学法人あるいは国立大学には、「時代」にキャッチアップ していくだけではなく、一歩も二歩も先んじて 「時代」をリード していくことが求められており、 なお、学生に「生

きる力」を しっかりと身に付けさせる ためにも、「教育」、「研究」、「地域貢献・社会連携」など、その業務の 全般にわたって、果敢に 「改革」して いくことが求められています。

「改革」に当たっては、いうまでもなく、「不易流行」、即ち、

「将来にわたって『守って』いくべきもの については あくまでも これを きちんと『守って』いく。

しかし、いま、『変える』べきもの については 躊躇なくこれを 『変えて』いく。」という基本姿勢に 立つことが求められます。

五 大分大学経済学部としても、 創立一〇〇周年を機に、これからの「在り方」に関し、 組織、運営の両面にわたって、 今後とも不断に 「改革」を進めて いただきたい と考えております。

おわりに、大分大学経済学部が、これまで
営々として築いてきた一〇〇年の歴史と伝
統の上に立って、輝かしい、次なる一〇〇年を
目指し、今後、ますます 充実・発展されるこ
とを 心からお祈り申し上げます。

経済学部同窓会、一般財団法人「四極会」とし
ても、 会員相互の「絆」を よりいっそう強固
なものとし、 今後とも、 母校 経済学部に対
し、心からなる ご協力、ご支援を させていた
だくことをお約束 申し上げます、私の お祝いの
言葉とさせていただきます。

令和四年六月二十五日

大分大学経済学部同窓会

一般財団法人四極会会長

石川 公一